

ビザ申請の打開策探り

李登輝訪日へ「奥の細道」作戦

日本と台湾の絆の強化に糸生をかける大の知日派が動き始めた。日本政府はビザを発給するのか、決断の日が近づいている。



中国のらみが利かない欧州ではのびのび?—。国際会議出席のため、チェコを訪問した李登輝氏(右)は10月19日、古都カルロヴィバリをパベル市長の案内で散策した

昨年九月の台湾大地震の後、李登輝総統(当時)は総統府で記者会見し、震災の復興状況について説明した。その時日本人記者が「被災地では取り組みの遅れに批判が出ています」

と、つい日本語で質問してしまつた。日本人とまったく変わらぬ日本語で答えた李総統は、やりとりが台湾の記者約百人にもわかれるよう、自ら中国語に訳して聞かせた。公式会見の場で気軽に通訳

までやってみよう「国家元首」がいるだろうか。記者たちから、李登輝さんらしい」といったニュアンスの温かい突いがどつと起こった。「国家元首」を通訳代わりに使ってしまった日本人記者は大いに恐縮した。

日本統治時代に生まれ育ち、京都大学で教育を受けた李氏が、すべての公職を辞したいま、最も楽しみにしていたのが十月二十九日から長野県松本市で開催された「アジア・オーブン・フォーラム」への出席だった。

と語り、広く日本各界の歓迎を受けて訪問したいという希望を表明していた。陳水扁総統が日本と疎遠だけに、日台関係を強化するには自分が懸け橋にならなければならない、という強い使命感があるようだ。李氏は日本訪問を決してあきらめていない。フォーラム出席だけでなく、色々な計画を練っている。この夏、李氏と会った日本のあるグループはこんな話を聞かされた。「中学時代は俳句が大好きだった。芭蕉はすべて読んだ。「奥の細道」巡りで半月は必要だ。道筋も全部調べた。ゴルフよりおもしろいですよ。ほかの人と違った面から日本を眺めてみたい」

「圧力」で事態一変?

フォーラムには特別の思い入れがある。十一年前に中嶋嶺雄東京外国語大学学長らと始めたもので、今回の松本会議が最終回となる。「最初はかみ合わなかったが、(幅広い分野から)評論家や学者、ビジネスマンも入ってきて、だんだんうまいくようになって。お陰で台湾と日本の関係もよくなり、日本のメディアも産経一社からいまでは十一社が支局を置く時代になった。これもフォーラムの貢献

のひとつでしょう」と役割を高く評価するだけに、「今年で終わるので、私が参加して日本で苦労されてきたみなさんにお礼を言いたいです」と強く出席を希望してきた。十月初め、台北支局勤務を終えて帰国する直前だった私が尋ねると、「行きますよ。でも東京には寄らない」と日程の一端を漏らし、進展ぶりを窺わせた。

李氏と打ち合わせを行ってきた中嶋学長らは、中国の朱鎔基首相が離日した翌日の十月十八日、東京都内で記者会見し、李氏が二十三日に台北で日本のビザ申請をする、との声明を発表した。日程はやはり、政治家と出会うような東京を避けるよう配慮されていた。中国政府が李氏の訪日に反対していることから、実現は難しいという見方が広がっているが、具体的にその可能性を探るのはこれが初めてとなる。慎重に準備を重ねたという中嶋学長は、「日本政府首脳としばしば直接、間接に連絡を取り、ビザ申請があれば日本側は真剣に考えざるを得ないという感触を得た」

「芭蕉すべて読んだ」

李氏本人は裏ごしから、「フォーラム前に」朱首相が訪日する。日本外務省は中共(中国)の圧力がこたえるでしょう。だれが外務省を助けるか。私がビザを申請したら、自民党、国会、マスメディアがバックアップしてくれるのか。このようなことまで考慮してやらねばならない」と語り、広く日本各界の歓迎を受けて訪問したいという希望を表明していた。

編集部 清水勝彦